

沖縄県公立幼稚園・幼稚園長会主催の講演会から「幼児教育」について学ぶ

所外研修として、5月8日(金)に沖縄県公立幼稚園・園長会主催の「講演」に参加しました。

津金美智子氏(文部科学省初等中等教育局視学官(併任)文部科学省初等中等教育局幼児教育課教科調査官、国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官)を講師として、「質の高い幼児期の教育を考える」と題して講演が行われました。

南風原町立中央公民館の会場を埋める幼稚園関係者の中、本教育研究所の教育研究員の5名と特別研修員1名も熱心に聞き入っていました。



写真1 講演会の会場にて

【講演の概要】

1 幼稚園等施設の役割

- 幼稚園教育は「生きる力の基礎」をはぐくむ
- 幼稚園は、幼児の主体的な活動である遊びを十分に確保
- 「遊び」の中で養われるもの
 - ・自己を表出する力
 - ・知識を蓄えるための基礎の形成
 - ・自己を取り巻く社会への感覚
 - ・豊かな感性
 - ・好奇心と探究心
- 幼稚園教諭に求められる資質
 - ・幼児一人一人の芽生えを読み取り、適当な環境を計画的に設定する専門性

2 幼児期の学校教育の質の保証

- 幼稚園教育の基本を踏まえる
- 体験の質が重要
 - ・協同する経験を重ねる
 - ・言葉による伝え合い
- 義務教育及びその後の教育の基礎を培う
 - ・自分の気持ちを調整する力
 - ・表現する過程を大切にされた自己表現
 - ・自ら考えようとする力
 - ・体験の多様性と関連性

3 小学校教育との接続の視点から

「学びの芽生え」(幼稚園)…好きな事に集中することを通して様々な事を学んでいく
 「自覚的な学び」(小学校)…学ぶという意識があり、与えられた課題を自分の課題として受け止め計画的に学習を進めること

- 小学校教育とのなめらかな接続のために
 (幼児期) 自覚的な学びを意識できるような活動を計画する。
 (児童期) 自覚的な学びを確立しながら好きな事に没頭する中で学ぶ意欲を育てる。

おわりに

- 中央教育審議会総会平成26年11月20日「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方」(諮問)
 「何を教えるのか」→知識の質・量の改善
 「どのように学ぶのか」→学びの深まりの重視
 「どのような力が身についたのか」→学びの成果の視点

教育研究員の感想 (研修日誌から)

津金先生の講演は、具体的な事例を通してのお話だったのでとても理解しやすく、頭の中にすっと入って来ました。紹介された事例は、自分の園でも日常にある出来事ばかりでしたが、大切なのはその日常の中に、どんな学びがあるのかを教師が的確に読み取り、学びの芽を引き出していくことだと感じました。これこそが専門的な能力であり、教師として常に磨き続けていかなければならない資質であると思いました。これまでの保育を振り返ると、子どもたちの活動の中にどんな育ちがあるのか読み取りが浅く、何気なく流してしまったこともあっただろうと反省しました。津金先生の言葉の中に、「何気ない遊びにどんな気づきがあり、何気ない一言にどんな意味があるのか、かすかな表情や行動の変化を読み取っていく」とありました。何気ないけれどとても大切な瞬間を逃さず捉えられる教師になりたいと思いました。今日のお話は幼稚園に携わっていない方にも十分伝わった内容だったと思います。伝え方も勉強になりました。(金城さくら)

幼児が小学生になる前に、発達段階を踏まえいろいろな体験や遊びを通して多くのことを学んでいるんだなと感じました。

幼稚園児の学びは、小学校児童の学びの基礎となるものだと感じました。「遊ぶことは大切」と、よく言われていますが、津金調査官の講演を聞いてより理解することができました。このことは、小学校の児童にも繋がることだと強く感じました。幼稚園の先生方は、本当に観察力があるなと感じました。幼稚園の先生方の粘り強い見守りに頭が下がります。

これから、研究に取り組んでいく中でも、「何を教えるのか」「どのように学ばせるのか」そして、子ども達に「どんな力を身につけさせようとしているのか」を意識しながら、授業の設計をしていこうと思っています。幼稚園から小学校、中学校へとつながる「学び」の連続性の在り方を考えさせられました。(大城厚)

津金先生の講演の中で、「人間関係」領域での「共同経験を重ね、かかわりを深め、互いに学び合える関係づくり」の視点と「体験を通して、自分の気持ちを調整する力の育成」という視点に「これだ!!」と感じました。私の研究でも大切にしたい視点です。幼稚園での教育の上に小学校は成り立っていて、幼稚園では遊びを通して「学びの芽生え」をはぐくみます。小学校では、それをさらに意図的に「自覚な学び」へ深めていく必要があります。幼稚園児と小学校の児童の発達段階を踏まえて、学びの質を高められるような授業を目指していきたいと思います。目の前の児童の実態から、児童の学びを見直すことを通して、道徳教育の見直しを図り、工夫改善を重ねていこうという前向きな気持ちになれました。(長門照乃)

講演会は、前もって美恵子指導主事の講話を聞いていたので、内容をすぐに理解することができました。1つの遊びを通して様々な領域で身につける力がつくのだと改めてわかりました。そして、幼稚園の教師が日々、幼児の活動している姿から読み取り、これを踏まえて支援しているのだと改めてわかりました。その読み取るアンテナが幼稚園の教師はとても広いのだと思いました。学年が上がって行くに従って小学校の教師のアンテナは小さくなりがちだと思うので、子どもの姿から読み取る力をより上げていきたいと思いました。そのためにも、さくら先生に読み取るコツを聞いてみたいと思いました。

謝辞で勲会長が「ただ目の前を見るのではなく、3月のゴールを見据えて」と話していたのを聞いて、今日のミーティングの話を思い出しました。私もゴールを見据えて研究をしていきたいと思いました。また、与那原町は今年から2カ年保育を始めたことを話してました。津金先生の話聞いて、幼児教育では多くの体験をする必要性を知ったので、その時間を作るためにも2～3カ年保育を是非実現してほしいと思います。(具志堅智美)

幼稚園教育においても「主体的に」というキーワードがあり、主体的に学ぶことがこの段階でも重要視されていることを再度確認できました。

先日、大城美恵子指導主事の講話でも同じようなことを感じ、成長するに従って、主体的に学習する態度が身につけているはずなのに、学年が上がるにつれて消極的になってしまうのはなぜだろうと思いました。その部分こそが教材研究であり、今進めている自分の研究にあたるのだろうと思っています。

講演の終盤に話があった、中教審総会の教育課程の構造化で、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」の3つの視点がありました。この3つの視点を意識し、これらを絡ませて授業展開を行っていきたいと思っています。特に、「どのように学ぶか」を「どのように教えるか」ではなく「どのように学ばせるか」という考えの基、「生徒が主体的に学習するためには」を常に意識して取り組んでいきたいです。

「所長講話」「幼稚園講話」「この講演」と常に言われ続けている「主体的」という言葉。生徒たちが大人になったとき、この社会の中で生活していくために重要となってくる主体的に活動できる力をしっかりと身につけさせていかなければいけないというプレッシャーを感じています。

講演を聴いて、自分の研究にますます力をいれていかなければと思いました。(古屋誠一)